科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号: 15401

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2019~2021

課題番号: 19K00790

研究課題名(和文)日本人大学生英語学習者による英語詩タイプ別の読解プロセスの研究

研究課題名(英文)A NIRS-Based Study on Japanese EFL University Learners' Literary Reading Processes for Different Poetry Text Types

研究代表者

西原 貴之(NISHIHARA, TAKAYUKI)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授

研究者番号:50469590

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、脳機能計測装置(島津製作所のLIGHTNIRS)を用いて、英語詩のタイプに応じて日本人大学生英語学習者の読解プロセスがどのように異なるのかを調べた。タイプ別の違いはほとんど見られなかったため(脳機能上の特徴は観察されなかった)、テクスト別の分析とした。その結果、読解時間の長い作品、テクスト理解確信度の低い作品、難しいと感じる作品は一致する傾向があった。調査参加者は作品解釈を行うにあたって様々な問いを生成したが、そのほとんどを自分自身で解決することができなかった。さらに、テクスト理解において、文法的な逸脱表現をはじめとして様々な表現に対して戸惑いを表明していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義本研究では、日本人大学生英語学習者の英語詩読解プロセスの特徴をいくつか明らかにすることができた。例えば、語彙的にかなり簡単と考えられる英語詩であっても、その作品を解釈する上では学習者は様々な表現に戸惑い、結果解釈を作り上げることが難しいことなどが明らかになった。文学教材を利用した英教育が様々な大学で実践されているが、学習者の実際の読解プロセスの特徴及びその中でのつまずきについて予測を立てた上での実践が求められる。本研究の成果は、このような予見を行う上での知見を提供し、より効果的な教育実践を確立していくための一助として利用されることが期待される。

研究成果の概要(英文): Using a brain-image technology device (Shimadzu's LIGHTNIRS), this study investigated how Japanese EFL university learners' reading process differs according to the types of English poetry. Since this study found few differences by poetry type (including brain function differences), most of the data analysis was conducted by poetry text. One of the main findings is that poems which took long reading time tend to be regarded as difficult with low understanding confidence. This study also showed that although participants generated a variety of questions in interpreting poetry texts, they were unable to solve most of them on their own. Furthermore, they expressed confusion about various linguistic expressions including grammatical deviations during the poetry understanding process.

研究分野: 外国語教育

キーワード: 英語詩読解プロセス 文学を使った英語教育研究 NIRS 読解時間 解釈 字義理解

1.研究開始当初の背景

現在、様々な学会で英語文学教材指導モデルの構築が目指されている。しかしながら、日本人英語学習者が英語で文学作品を読む際にどのように読むのか、その実態は依然として研究が乏しい。結果として、学習者の英語文学読解プロセスの実像を踏まえることなく指導実践研究が進められている。

一方で、学習者の大脳新皮質の活動をリアルタイムに観察することを可能とする脳機能計測装置(近赤外分光法を用いた装置)が開発され、人間の認知処理研究に活用されている。この装置は、調査参加者の大脳新皮質に微弱な近赤外光を照射し、その光が血中へモグロビンにどの程度吸収されるかを見ることで、当該部位の賦活状況を調べるものである。この方法は頭部に装置を取り付けるだけで課題取り組み時の脳の賦活を安全かつ自然な状況で観察することができる。この装置により、日本人英語学習者の英語文学作品読解の特徴の一端を調査することが可能である。(なお、研究開始当初は視線計測装置も併用して調査をする予定であったが、レンタル料の高騰により、本研究では使用を断念し、脳機能計測装置のみを使った調査に変更を行った。)申請者は過去の科学研究費補助金研究課題(24652126、15K16801)において、この脳機能計測装置を用いて、日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の言語野の賦活状況について調査を行った。本研究は、過去の研究の成果と反省点に基づき、調査方法及び調査材料を刷新した上で日

2.研究の目的

本研究は、脳機能計測装置を用いて、英語詩のタイプに応じて日本人大学生英語学習者の読解 プロセスがどのように異なるのかを調べ、大学における英語文学教材読解指導モデル構築のた めの基礎となるデータを得ることを目的とする。

(a) 学習者の読解プロセスは、詩のタイプによってどのように異なるのか。

本人大学生英語学習者の英語詩読解時の脳の賦活状況を調べたものである。

- (b) 上記 (a) のプロセスにおいて、韻や反復などのいわゆる「文学的言語表現」はどのように処理されるのか。
- (c) 上記の (a) と (b) は、学習者の文学経験や英語力といった個人的要因によって異なるのか。異なるとすればどのような違いが見られるのか。

3.研究の方法

(1)調査参加者

調査参加者は、利き手が右手である日本人大学生英語学習者 24 名 (男性 12 名、女性 12 名) である。英語力に関しては、TOEIC で 545 点から 925 点の学習者が含まれている(平均値は 787.6 点、標準偏差は 106.7)。また、文学経験に関しては、日本語と英語両方において乏しく、現在の日本人大学生としては平均的な集団である。

(2)調査材料

英語詩を9篇用意した。まず、英語詩集から短い詩を収集した。抽出した詩の中から、低頻度語または複雑な構造の文を含んでいる作品、調査参加者にとってあまりなじみのないトピックの作品(特定の地域や宗教、神話などを扱っている作品)、性的な読みを強く連想させる作品、を除外し、調査材料として19の候補作品を抽出した。19の作品は文体論的な特徴により、5種類のタイプにカテゴリー分けを行い、Type A~D からそれぞれ2作品ずつ、Type E から1作品(19作品中1作品しか該当するものがなかったため)の計9作品を調査材料として抽出した。9つの作品にはテーマ上の共通性はない。

今回調査で使用したテクスト(タイトルまたは 1 行目)は以下の通りである。なお、括弧内の数値は、順に行数、語数、音節数、語彙レベル、を指す。語彙レベルは SVL 12000 を基に算出した(1.0 から 12.0 の間の値を取り、値が小さいほど使用頻度が高く、学習者には語彙的に容易であることを意味する)。 D2 と E1 が他の作品よりもやや平均語彙レベルが高いが、Fisher's exact test によると、9 作品間に有意差は検出されなかった(p=.59, Cramer's V=.18)。調査参加者の英語力から判断するに、いずれも語彙レベルとしてはかなり簡単な作品と言える。

【Type A: 具象詩: 詩行が絵のように配列されている作品】

- A1: Alan Riddell, "Help!" (1, 6, 6, 1.0)
- · A2: Abdul Ghafar Ibrahim, "The Wall" (2, 5, 6, 1.2)

【Type B:詩行が句や節、文などの統語構造と一致している作品】

- B1: Richard Aldington, "October" (4, 22, 24, 1.1)
- B2: Langston Hughes, "Island" (8, 30, 36, 1.3)

【Type C:平凡な内容が詩行の形に配列されている作品(なお、いずれの作品とも詩行が統語構造と一致していない)】

- \bullet C1: William Carlos Williams, "This Is Just to Say" ($12,\,28,\,38,\,1.2$)
- C2: Jack Kerouac, "The bottom of my shoes" (3, 12, 13, 1.3)

【Type D: 文構造を欠いている作品(名詞句や副詞句のみで構成される作品)】

- D1: Cor Van den Heuvel, "city street" (3, 9, 13, 1.2)
- D2: John Stevenson, "cold moon" (3, 8, 13, 1.8)

【Type E:逸脱的統語構造を含んでいる作品】

• E1: Peter Yovu, "an unseen bird sings" (3, 12, 13, 1.8)

合わせて、調査参加者の個人特性を把握する目的で、利き手を調べる The Edinburgh Handedness Inventory、英語力に関する質問紙(取得した英検の級や TOEIC のスコアなど) 英語詩と日本語詩の読解頻度及びそれらの読解が好きかどうかを尋ねる質問紙、日本語と英語の詩人の知識について尋ねる質問紙(Author Recognition Test)も使用した。

脳機能計測装置としては、島津製作所の LIGHTNIRS を用いた。今回の調査では、左右両側それぞれ 10 箇所の大脳新皮質の賦活を調べた。この装置は、近赤外光を調査参加者の大脳新皮質に向かって照射し、その光の血中へモグロビンによる吸収率を調べることで、各部位のヘモグロビン濃度を推定する。したがって、光の吸収率が大きいほど、その部位には血液が集まっており、結果としてその部位の賦活が高まっていると判断することになる。この装置により、学習者がテクストを読んでいる最中の各部位の賦活をリアルタイムで観察・記録することが可能となる。

(3)調査手順

調査参加者の募集は、研究代表者が担当する 2 年生以上を対象とした英語関連専門科目で行った。募集時には、調査参加者の条件(日本人であること、右利きであること) 調査の目的、方法、調査機器の安全性、報酬等について説明を行った。合わせて、研究代表者の所属先の学内倫理委員会で本調査の実施に関して承認手続きを行い、了承を得た。

参加希望者には、書面で同意書を書いてもらい、同時に The Edinburgh Handedness Inventory(利き手に関する質問紙)によって調査参加条件を満たしているかどうか再確認した。その結果、希望者は全員すべての条件を満たしていたため、全員に参加してもらう形とした。さらに、英語力に関する質問紙、英語詩と日本語詩の読解頻度及びそれらの読解が好きかどうかを尋ねる質問紙、日本語と英語の詩人の知識について尋ねる質問紙、に回答してもらった。

調査は、調査室で調査参加者ごとに個別に実施した。調査時には、まず調査手順、調査課題、注意事項の説明を行った。調査課題の説明では、(i) パソコン画面上に提示される9つの英語詩に対して字義理解課題と解釈課題に取り組むこと(9つの英語詩の提示順序は調査参加者ごとにランダム化)(ii)9作品分の課題終了後に、紙媒体で9作品を実際に読んだ順序で再度見ながらインタビューを行うこと、を伝えた。インタビューのやり取りをボイス・レコーダーに録音する許可は口頭で得た。

字義理解課題では、(i) 作品の詩行が1行ずつ提示され、自分のペースで各行の字義理解をすること(時間制限なし)(ii) その行の字義理解が終ったらスペースキーを押すこと、(iii) スペースキーを押すと次の行が提示される(前の行は提示されたままであり、さらに一度行を提示させたらその行を削除することはできない)(iv) すべての行の提示が終ると 30 秒のレストが始まり、その後で解釈課題に移ること(解釈課題が始まった後は、その作品の字義理解課題画面に戻ることはできない)を伝えた。なお、具象詩については単純な詩行の形で提示した。

解釈課題に関しては、(i) 作品全体を見ながら、その作品を通して詩人は何を述べようとしていたのか自分のペースで考えること(時間制限なし)(ii) この課題の解答が出来た、または解答をあきらめた場合は、スペースキーを押すこと、(iii) スペースキーを押すと、30 秒のレストの後に次の作品の字義理解課題が始まること、(iv) 考えた解釈については後のインタビューで尋ねること、を伝えた。 具象詩については、解釈課題で初めてその形状が調査参加者に示された。この「字義理解課題 \rightarrow 30 秒間のレスト \rightarrow 解釈課題 \rightarrow 30 秒間のレスト」という流れを 1 セットとし、合計で 9 作品分このセットを繰り返した。

次に、脳機能計測装置の装着と設定を行い、練習テクストで字義理解課題と解釈課題の取り組み方を確認した後、本調査を行った。

課題がすべて終了し、脳機能計測装置を取り外した後、テクストを紙媒体で読んだ順に提示し、インタビューを行った。やり取りはボイス・レコーダーに記録した。インタビューでは、各作品について、(i) 字義理解をする上で難しかった行、(ii) そのような行が複数ある場合は、難しかった順序、(iii) 字義理解の正確性への確信度の度合い(百分率で回答) (iv) 作者はこの作品で何を述べようとしていたのか(解釈課題の解答) (v) 自身の解釈に対する確信度の度合い、(vi) 作品を読んでいるときに他に何か気になったことがあったかどうか、を尋ねた。さらに、9 作品分のインタビューを終えた後に、(vii) 字義理解課題において難しいと感じた作品があったかどうか(複数ある場合は、その順序) (viii) 解釈課題において難しいと感じた作品があったかどうか(複数ある場合はその順序) (ix) 読んだことのある作品があったかどうか、という点も尋ねた。

(4)得られたデータと分析手順

本研究では、(データ A) 脳機能計測装置による脳の賦活の強さを示すデータ、(データ B) 各作品の字義理解課題と解釈課題それぞれの遂行にかかった読解時間 (脳機能計測装置がこのデータも記録) (データ C) インタビューで得られた質的データ、が得られた。データ A については、調査参加者ごとに各作品の字義理解課題遂行中と解釈課題遂行中のオキシへモグロビン濃度 (先行研究で最もよく使用される値) の平均値を算出した。ただし、この数値は調査開始時点

のオキシヘモグロビン濃度を 0 と設定し、それとの相対値という形で計測地点ごとに計測されている。つまり、オキシヘモグロビンの絶対濃度を意味しているのではない。そこで、z 変換した値を用いて、各調査参加者内で各作品の課題ごとにどのようにオキシヘモグロビン濃度の値が変化したのかという観点から分析を行った。データ B に関しては、脳機能計測装置で自動で記録されているデータを使用した(スペースキーが押されるタイミングが記録されている)。字義理解課題に関しては、行ごとに読解時間が記録されている。データ C については、インタビュー後に文字起こししたものを元に、質的に分析を行った。

4. 研究成果

チャンネルの配置は、1~10 チャンネルが右脳、11~20 チャンネルが左脳である。両側とも側頭部に計測装置を装着した。具体的な配置は表 1 と表 2 を参照されたい。

いくつかの調査材料を読んだことがあった調査参加者がいたことと、機器のトラブルにより、 テクストによって分析対象とした調査参加者の人数が異なることとなった。表 3 に、各テクスト で分析対象とした調査参加者数をまとめた。また、すべてのテクストを読んだことがなく、かつ 機器のトラブルもなかった調査参加者は 19 名であった。

なお、すべての分析を通して、詩のタイプ間で調査参加者の読解プロセスに関して何らかの異なる特徴を観察することがほとんどできなかった。以下の結果報告では、主に各テクストを基本単位として、結果報告を行う(詩のタイプ間での比較等は行わない)。そして、テクスト内で字義理解課題と解釈課題の結果を比較する際には表 1 に示した人数分のデータを分析対象とし、テクスト間で比較をする際には前述の19名分のデータのみを用いて分析を行う。

表 1. 右半球のチャンネル配置 (7側が前)

	1		2		3	
4		5		6		7
	8		9		10	

表3. 各テクストで分析対象とした調査参加者数

A1	A2	B1	B2	C1	C2	D1	D2	E1
23	24	23	24	20	24	24	24	24

表 2. 左半球のチャンネル配置(14側が前)

	11		12		13	
14		15		16		17
	18		19		20	

(1)調査課題 (a) の検討

データ A から: まず、9 つのテクストの脳の賦活の強さに違いがあるかどうかを確認する目的で、チャンネルごとに、字義理解課題遂行中の調査参加者ごとの平均オキシヘモグロビン濃度に z 変換を施した値に対して、有意水準 5% として対応のあるデータの分散分析を行った(19 名分のデータを使用)。 その結果、有意差が検出されたチャンネルは見られなかった。解釈課題についても同様の分析を行ったところ、同じく有意差が検出されたチャンネルは見られなかった。さらに、その効果量 (η^2) に着目すると、字義理解課題では「小」のチャンネルが多かったが、解釈課題になると「中」のチャンネルが増えており、テクスト間の違いがより顕著になってくるようであった(ただし、前述の通り有意差は検出されていない)。

次に、それぞれのテクストにおいて、各チャンネルで、字義理解課題と解釈課題の間の脳の賦活の強さに違いがあるかどうかを調べるために、対応のあるt 検定を行った(表3 に示した人数分のデータを使用)。その結果、有意差が検出されるケースは極めてまれであり、有意差の見られるチャンネルや、値の大小関係等に解釈可能な一定の傾向は見られなかった。ただし、CI は各チャンネルの平均値は他の作品よりも高い傾向があり、特に解釈課題において他の作品よりも脳の賦活が高かった。このことは統計的にも支持された。その一方で、DI は他の作品よりも脳の賦活が高かった。このことは統計的にも支持された。その一方で、DI は他の作品よりもれている。また、チャンネルの値が字義理解課題と解釈課題でどちらが高い傾向があるのかを各テクスト内で比較した。対応のあるt 検定を行った結果、解釈課題の方で賦活が高くなるテクスト(B1、C1、C2)と、字義理解課題の方で賦活が高くなるテクスト(B2、D2)、課題間で賦活の高さが変わらないテクスト(A1、A2、D1、E1)が見られた。この結果に関して、後述する読解時間、解答の確信度、主観的困難度などに関する結果と照らし合わせた結果、解釈可能な一定の傾向は見出すことができなかった。

また、Channel 12 と Channel 20 は解釈課題において脳の賦活が高い傾向が見られた。字義理解課題との値のギャップ (跳ね上がり)も大きかった。しかし、有意差は限られたチャンネルとの間でのみ観察されるにとどまった。同じく、Channel 3 は解釈課題において脳の賦活が低い傾向が見られた。字義理解課題との値のギャップ (値の減少)も大きかった。ただし、このことについても有意差が確認されたのは限られたチャンネルとの間のみであった。

データ B と C から: インタビューで収集した課題回答への自身の確信度と調査参加者の主観的なテクスト困難度(データ C の一部)と関連づけながら、読解時間(データ B)の分析も行った。その結果、(i)9 作品は同じ語彙レベルではあったが、読解時間、解答の確信度及び主観的な困難度は作品によって異なっていた、(ii) 具象詩は他のタイプの作品よりも解釈課題で 1 単語あたりの読解時間が長かった、(iii) 字義理解課題よりも解釈課題の方が時間がかかった、(iv) 読解時間の長い作品、確信度の低い作品、難しいと感じる作品は一致する傾向があった(字義理解課

題における B1 と E1、解釈課題における A1、D2、E1) (v) 解釈課題の解答の確信度は字義理解課題の解答の確信度よりも低かった、(vi) 調査参加者は解釈課題は字義理解課題よりも難しいと感じた、(vii) 解釈課題でどの作品を難しいと感じるかは個人差が大きかった、という結果が統計的に示された。また、一般に文学作品読解時間は単にテクスト困難度だけでなく、その作品の内容や形式的側面を楽しんだり、鑑賞することによっても長くなることが知られている。しかしながら、(viii) 今回の調査ではこのことに該当するケースは観察されなかった。

さらに、調査参加者の課題の回答(データ C)を質的に分析した。その結果、(ix) 調査参加者は解釈課題を行うにあたって様々な問いを生成したが、そのほとんどを自分自身で解決することができなかった、(x) 調査参加者は解釈課題の解答を自分なりに作成することができたとしても、それに十分に自信を持つことができず、結果として解答の確信度は低くなった、(xi) 字義通りの内容を繰り返すだけで解釈に満足している調査参加者がいる一方で、より深い意味を見出すことができなかったとして確信度が低くなった調査参加者もいた、という傾向が見られた。

(2)調査課題(b)の検討

字義理解課題取り組み時の各行の脳機能の賦活の高さを各テクスト毎に比較した。その結果、有意差が検出されるケースは極めてまれであり、有意差の見られるチャンネルに解釈可能な一定の傾向は見られなかった。調査材料には、表現の反覆(B1)や文法的逸脱(E1)といった文学的言語表現を含んだものがあったが、これらの表現を含んでいる詩行に関して脳機能の特異な賦活は観察されなかった。

続いて字義理解課題取り組み時の読解時間という観点からも分析を行った。その結果、文法的な逸脱表現が現れると、それに伴って読解時間も統計的に有意に長くなることが示された。さらに、調査参加者はインタビューの中でその表現の理解に対して多くの戸惑いを報告しており、調査参加者のテクストの字義理解を著しく妨げていた。

また、E1 の解釈課題に関するインタビューでは、文法的な逸脱表現以外の様々な表現に対して戸惑いを表明しており、特にこの表現が調査参加者の読解プロセスに特異な影響を与えている様子は観察されなかった。

(3)調査課題 (c) の検討

学習者の文学経験との関係については、調査参加者の文学経験が全員乏しかったため、その影響について検討することはできなかった。調査参加者の英語力との関係については、脳機能の賦活や読解時間に関するデータとの相関を調べた。しかしながら、その結果に関して何らかの解釈可能な一定の傾向は確認されなかった。

(4) その他の結果

調査参加者による解釈課題の解答(調査参加者から得られた解答のうち、分析可能であった 174 解答を対象)を分類したところ、以下の 4 タイプが見られた。

- ・(タイプ1)字義的解答:単に字義的な意味・内容を繰り返しているだけの回答
- ・(9712) 字義的解答 + α : 大半は字義的な意味の繰り返しであるが、一部に字義的ではない内容 (付加された情報) が含まれている回答
- ・(タイプ3)初歩的解釈解答:テクスト内の字義的表現からの乖離・離脱は見られるものの、字義的理解に基づけば比較的構成しやすい内容の回答
- ・(タイプ4)発展的解釈解答:字義的理解から離れており、かつ新規性の高い回答分類は研究代表者と 1 名の分析アシスタントで個別に行い(κ =.95)、判断が分かれたものについては議論により最終的なタイプを確定した。また、各解答に関して、解答の根拠が示されているかどうかも同じく 2 名で個別に判断した (2 名の判断は完全に一致し、 κ =1.00)。

作品によって解釈課題のどのタイプの解答が多いかは多少の変化は見られた一方で、解釈課題の解答に根拠を示した回答はA1以外のすべての作品において数が少なかった。しかしながら、解答の根拠が示される割合は解答タイプが1から4になるにつれて徐々に高くなっていった。

さらに、解答タイプの違いによって解釈課題の確信度に変化があるかどうかを確認したところ、解答タイプが4に近づくにつれて確信度が下がる傾向があり(有意差はあるが小さい効果)タイプ2とタイプ3およびタイプ2とタイプ4の間で統計的に有意な違いが見られた。作品の表層的理解にとどまった調査参加者は自身の字義的な解答に満足しており、かつ比較的高い自信を持っている一方で、より作品を読み込んでいる調査参加者は自身の解答の適切性に関してより謙虚な自己評価を行っていると言える。

なお、解答タイプの違いによって解釈課題の読解時間が変化するかどうかも同様に調べたところ、有意差は検出されなかった。さらに、各チャンネルの賦活の高さが解答タイプによって変化するかも調べたところ、有意差が検出されるケースは極めてまれであり、有意差の見られるチャンネルや、値の大小関係等に解釈可能な一定の傾向は見られなかった。

最後に、根拠が示されている解答とそうでない解答の間で確信度と読解時間で違いが見られるかどうかを確認したところ、有意差は検出されなかった。各チャンネルの賦活の高さが解答根拠の有無によって変化するかも調べたところ、有意差が検出されるケースは極めてまれであり、有意差の見られるチャンネルや、値の大小関係等に解釈可能な一定の傾向は見られなかった。

5 . 主な発表論文等

「雑誌論文 〕 計6件(うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件)

し雜誌論又J 計6件(つち貧読付論又 4件/つち国除共者 U件/つちオーノンアクセス 6件)	
1.著者名 西原貴之	4.巻 6
2 . 論文標題 日本人大学生英語学習者の文学作品読解時のつまずき	5 . 発行年 2020年
3.雑誌名 JAILA Journal	6.最初と最後の頁 26-37
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	 査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著
1.著者名 西原貴之	4.巻 18
2 . 論文標題 コミュニケーション英語 、 、 の教科書に掲載された文学教材の数とバリエーション及びその設問・ 言語活動	5 . 発行年 2020年
3.雑誌名 LET関西支部研究収録	6.最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著
1 . 著者名 吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子	4 . 巻 第9回
	_
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子	第9回 5 . 発行年
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし オープンアクセス	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3 査読の有無
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし オープンアクセス	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3 査読の有無
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) 1 . 著者名 西原貴之 2 . 論文標題 日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき:誤答分析を通して	第9回 5.発行年 2021年 6.最初と最後の頁 1-3 査読の有無 無 国際共著 -
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子2.論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る3.雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なしオープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)1.著者名 西原貴之2.論文標題	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3 査読の有無 無 国際共著 - 4 . 巻 第9回 5 . 発行年
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)なし オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) 1 . 著者名 西原貴之 2 . 論文標題 日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき:誤答分析を通して 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3 査読の有無 無 国際共著 - 4 . 巻 第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁
吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子 2 . 論文標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 3 . 雑誌名 JAILA第9回全国大会プロシーディングス 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)なし オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) 1 . 著者名 西原貴之 2 . 論文標題 日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき:誤答分析を通して 3 . 雑誌名	第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁 1-3 査読の有無 無 国際共著 - 4 . 巻 第9回 5 . 発行年 2021年 6 . 最初と最後の頁

1.著者名 西原貴之	4 . 巻 7
2.論文標題	5 . 発行年
コミュニケーション英語 、 、 の文学教材に含まれる文法項目	2021年
3 . 雑誌名	6.最初と最後の頁
JAILA Journal	91-104
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)	 査読の有無
なし	有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著
1 . 著者名 Takayuki NISHIHARA	4.巻
	F 36/- F
2.論文標題 Pursuit of Literary Competence: Past, Present, and Future	5 . 発行年 2022年
3.雑誌名	6.最初と最後の頁
JAILA Journal	77-91
日報やAtan ODA (マンドカリナインド カナ 地口 フン	
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
 オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスとしている(また、その予定である)	-
[学会発表] 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)	
1 . 発表者名 吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子	
2 7V = 176 FIX	
2 . 発表標題 教育文体論を用いたライティング分析:日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る	
3.学会等名	
第9回日本国際教養学会	
4.発表年	
2021年	
1.発表者名	
西原貴之	
2. 発表標題 日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき: 誤答分析を通して	
ロー・アン・フェー・エクロープロログ、アルコックログ、アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・ア	
3.学会等名 第9回日本国際教養学会	

4.発表年 2021年

1.発表者名 Azumi YOSHIDA ・Masayuki TERANISHI・Takayuki NISHIHARA・Masako NASU	
2 . 発表標題 The Influence of L1 on L2 Proficiency: Stylistic Analysis of English Writings by Japanese EFL L	earners
3 . 学会等名 PALA (Poetics and Linguistics Association) 2021 (国際学会)	
4 . 発表年 2021年	
1.発表者名 西原貴之	
2 . 発表標題 語彙的に簡単で短い英語詩は学習者にどう読まれるか:読解の難しさを中心とした考察	
3.学会等名 第46回全国英語教育学会	
4 . 発表年 2021年	
1.発表者名 西原貴之	
2.発表標題 文学能力モデルに基づいた評価の有用性の検討:相関を用いた文学読解定期試験結果のベイズ推計による5	分析
3.学会等名 第10回日本国際教養学会	
4 . 発表年 2022年	
〔図書〕 計1件	- 7V./- h-
1.著者名 Azumi YOSHIDA ・Masayuki TERANISHI・Takayuki NISHIHARA・Masako NASU	4 . 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5.総ページ数 26
3 .書名 Pedagogical stylistics in the 21st century (第14章)	

〔産業財産権〕

	ത	

英語文学教材読解と第2言語習得の関係を探る				
https://home.hiroshima-u.ac.jp/ntakayk/				
6 . 研究組織	<u>, </u>			
氏名 (ローマ字氏名)	所属研究機関・部局・職	備考		

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7.科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
大门则九伯丁国	1다 구기 에 건 1였(天)